

「世界にひとつだけの植木鉢で、花をそだてよう！」
刈谷市立小垣江東幼稚園（愛知県）

土粘土の鉢作り = 親子陶芸教室 =

5月26日（水） 3・4・5歳児

3歳児のK児は、土粘土をもらうと、「これなあに？」と不思議そうな顔をして、そーっと手を出した。にゅるっとした感触に、思わず笑顔がこぼれる。母親から小さな塊をもらうと、すぐに指で穴を開けたり、手でくちゃくちゃとこねたりしだした。鉢を作る母親の隣で、形にするわけでもなく、感触を楽しんでいた。同じ3歳児でも、R児は、粘土を触るのは初めてだったが、母親の動作を真似しながら、丸めたり、伸ばしたりして、好きなものを作っていた。そして、自分の作った物を「うなぎ」「おにぎり」「お肉」と食べ物ばかりに見立てていた。教師が、R児の見立てに合わせて、食べる真似をすると、うれしそうに次々に差し出し、また、違う食べ物を作り出した。3歳児は、土粘土に触れるのが初めての幼児ばかりで、すぐに手が出ない幼児もいたが、教師や周りの友達や母親が手をどろどろにして作り出すと、どの幼児も手に取り、感触を楽しみながら、思い思いのもの作りを楽しんでいた。

4歳児のY児は、去年は最後まで集中できずに走り回っていたが、今年は「ぼくがやる」と、「形はどうする？」「こういう風にしたい」と母親と話しながら作ることができた。また、A児は、去年、手作りの鉢で花を育てた経験から「お花の模様をつけよう」「今年は何のお花を植えるのかな？」と期待して作ることができた。去年の経験がある4歳児は、それぞれに作りたいものがあるようだった。

5歳児のS児は、3回目とあって、作り方や道具の使い方も分かり、「次は、これを使って（粘土ベラ）模様をつけよう」「穴を開けるのは、これでするんだよね」と道具を持って来たり、N児は粘土を焼くと植木鉢だけでなく、お茶碗も作れることを知って、「今度は、お茶碗も作ってみたいな」と、とても興味をもって作っていた。5歳児ともなると、母親と協力して作る姿が見られ、模様付けや小物作りにそれぞれのイメージが生かされていた。



「今度は、おにぎりつくろう」
「おだんごできた」と、好きなものをいくつも作る3歳児

3年目ともなると、立派です。
親子共に満足そうです。



オジギソウを育てよう = 親子栽培 =

6月24日～10月

出来上がった素焼きの植木鉢に、用務員さんが育ててくれたオジギソウを親子で植えた。夏休みに入るまでは、毎日水掛けをしながら育て、夏休みには、家庭に持ち帰って、親子で世話をした。

夏休みを終えて、園に持ってくる頃には、ピンクのかわいい花が咲き、種ができ始めていた。子どもたちは、大きく育ったオジギソウを誇らしげに持ってきた。

「ピンクのお花、
かわいいね」
「見て。触ると、
葉っぱがくっつくよ」



「ホントだ。
面白いね」

オジギソウをきっかけに、花に関心をもつようになりました。私自身が花を植えたりすることが苦手で、子どもは、花は花屋で買うものだと思っていたようです。でも、オジギソウが、つぼみになり花を咲かせたことから庭にある草に「お花が咲くように、水をあげよう」とジョロ口を手に走り回っていました。家では飽きっぽい子どもが一生懸命になる姿が見られました。

(3歳児保護者)

夏休みにオジギソウを家で育てていた時、つい、水やりを忘れてしまい、しなっとなっていたら「お母ちゃん、大変！大変！オジギソウが元気ないよー」と叫んでいました。急いで水をやり、しばらくしたら、「お母ちゃん、オジギソウが元気になったよ！」とうれしそうに、言いにきました。そして、オジギソウに向かって、「よかったね」と声をかけている姿に、なんだかうれしくなっていました。花が咲いた時は、写真を撮りました。

(3歳児保護者)

オジギソウの花が咲いたり実がなったりすると「ママ、また、花が咲いたよ！」とうれしそうに報告してくれました。台風が来ている時などは、「ママ、家の中に入れた方がいいんじゃない？」と心配していました。自分たちで育てることによって、植物を大切にすることを覚えられたと思います。(4歳児保護者)

オジギソウの鉢は、野菜の鉢と比べかなり小さく、同じような勢いで水をかけると土が流れ出てしまいます。それを、私が言う前に、「小さい鉢はちょっとずつお水をあげないと土がこぼれちゃう。」「だから、S君(弟)は、難しいから、やっちゃダメ」と言って水やりをしていました。『ああ、子どもなりに考えているんだな』と子どもの成長を感じました。夏休み中、欠かさず大事そうに水をやる姿、ものを育てる気持ちは大切にしたいなあと感じました。(4歳児保護者)

夏休みに家で、オジギソウに水かけをするのがR子の役目でした。「今日は花が咲いたよ。」「お水たくさんあげるね」とか、台風の時には「オジギソウ大丈夫かな」と、植物の世話を通して、優しい心や育てることの大切さを学ぶことができ、親としてうれしかったです。(5歳児保護者)

昨年同様、オジギソウの栽培をした娘は、ピンクの花が咲き、種ができていく・・・そんな勝手が分かっているため、日々私に「お母さん知ってる？」と得意気に話す娘を見て、一年で随分、成長したなと思いました。なかなか家でやらせてやれない『土に触れる』体験は、本来子どもが持つ、子どもらしさみたいなものを自然に引き出してくれるようで、陽だまりのような温かさを感じました。(5歳児保護者)

<考察と反省>

- ・ 土粘土は油粘土では感じられない感触を味わうことができ、子ども本来の遊びを引き出し、見立てやつもりを楽しみながら作ることができた。親子で取り組んだことで、幼児は思いを実現できる楽しさを味わうことができたと思われる。
- ・ 家庭ではなかなか経験できない鉢作りやオジギソウの栽培を通して、幼児だけでなく、親子でいろいろな感動を味わうことができた。特に、家庭での栽培は、保護者にとって子どもの学びや成長に気付くきっかけとなり、親子で感動できる活動となったと思われる。

みどころ

土粘土の感触を味わいながらの植木鉢作りは、幼児はもちろん、保護者も活動の楽しさを味わえる内容で、3年間の積み重ねを楽しむこともでき、親子が主体的に取り組めることが分かります。植木鉢を作るということで、「栽培する」という目的にも期待感が持て、次の取り組みである栽培への関心や意欲を高めることにも結びつきました。

また、栽培物にオジギソウを選んだことで、日々の世話や生長を楽しみにすることができました。繰り返し栽培物とのかかわりを楽しめることで、親子で多くの気付きや心の動きを共有することができ、継続的に進める親子活動になりました。3、4、5歳児という発達や親子活動の経験の違いを十分に考慮して進め、幼稚園のみんなが共通に話題にできる取り組みとして大切にしていることが、保護者の感想からも分かります。